

## 命をつないだにぎり飯

加須市立大桑小学校 五年  
福田玲奈

わたしは、学校の行事や家族と遠出の外出時のお弁当が必要な時には、おにぎりやごまこんぶとりのりのご飯にのせたものを作ってもらいます。パンも朝食によく食べますが、おべん当というところ、ご飯・お米の方が好きです。お米は、パンやめんとくらべて、満ぶく感があります。わたし達の体にエネルギーを与えてくれます。わたしの家族は、一日一食は必ずお米を食べています。わたしのおばあちゃんは「お米を食べないと、何か足りない気がする。」と言います。

わたしは戦争に関するいい画をみて、むねがいたくなるほどの光けいが目にはやきつきました。原爆が落とされ、空ばくを受けた事で、一しゅんにして全てがなくなりました。命、家族、建物、食料、何もかもが失われたのです。広島市では「にぎり飯計画」がすぐに発令されました。八月五日から九日までの四日間で、七十五万七千食ものにぎり飯が救えん物としてし給されたそうです。テレビで体験を語るおじいさんは、「にぎり飯を口に入れた時、自分が生きている実感とあの味は忘れていない。あのにぎり飯で、この命があるんだ。」と答えていました。他の男性も、「にぎり飯の一つぶ一つぶが、きらきらして見えた。にぎり飯は、生きる力を与えてくれた。」と強く感しやしていました。そのにぎり飯を作っていた女性は、「わたしは一日中、飯をにぎっていました。うめぼしなどが手に入ると、にぎり飯の味つけを工夫しました。わたしに出来る事をする、その一つの思いで、にぎり続けました。」この時に、にぎり飯にこめられた思いや、生きる力と希ぼうをもらった多くの人々、にぎり飯は戦下では一つの希ぼうだったと思います。わたしのおばあちゃんとお母さんは、茶わんについているごはんつぶを見ると、「きれいに食べなさい。」と言います。今までは、ただきれいに食べる事しか考えていませんでした。しかし、戦争の事を知った今、ごはんつぶ一つの大切さがわかります。当たり前に見えるものだと思っていました。また、そのお米を作ってくれている人達への感しやも、あらためてしなくてはいけないものだと思いました。

今では、お米の種類はたくさんあります。地いきの風土を生かしたり、研究されて作られています。また、スーパーやコンビニでは、たくさん種類のにぎり飯が並んでいます。いろんな具や味つけのあるおにぎりがある中で、シンプルにしおだけにぎられたしおむすびがあります。このしおむすびこそが、戦時中・戦後に人々の生命をつないだにぎり飯の代表だと思えます。現代らしいおにぎりもあれば、むかしから受けつがれているにぎり飯も、今もなおあり続けています。日本の伝とうと歴史がお米にもあり、生命と深く関わってきた事を学びました。